

シリーズ②

授業を
どう変える!?

ビジュアル解説

小学校社会

子どもたちにとって最強の教科に！



文部科学省教科調査官

小倉 勝登

先生方に是非お伝えしたいのは、子どもたちが楽しいと思える授業ができれば、社会科は最強の教科だということです。数年前に行われた学習指導要領の実施状況調査の質問紙の、「社会科の学習は好きですか。」という問いに子どもの反応は、6割以下になっています。一方で、「社会科の学習をすれば、普段の生活や社会に出て役に立つと思いますか？」という質問に対して、約8割の子どもが役立つと応えています。ということは、子どもたちは、社会科は“内容的に役立つと理解しているけれど好きではない”という実態です。これは、私たちや現場の先生にとって大きな課題です。しかし、裏を返せば、子どもたちが楽しいと思える社会科の授業ができれば、これは役に立つし面白いということになり、子どもたちにとって“最強の教科”になり得ます。

そこで、いたって単純なのですが、先生方ご自身に“社会科の授業づくりを楽しんでほしい！”と言いたいのです。先生が楽しくないのに、楽しい授業ができるはずがありません。教材研究をして、自分が驚いたり感動したりしたことを子どもたちに伝えることから始めることをお勧めします。

子どもの姿を想定した授業づくり

子どもの姿や、子どもの問い、そういったことを想定して授業づくりをすることがとても大事だと思っています。やはり社会の授業がうまい先生は、よい資料を見つけてそれを提示しています。わたしも現場に行って自分で感じてみて、“受け持っているあの子だったらどう感じるか”，“どういう問いをもつか”，“これをもとに話し合うと、誰がこんなことを言うだろう”ということ想定して、授業づくりをしています。

また、自分の授業をビデオで撮って見たり、同じ職場の先生方と、よい授業やよくない授業もたくさん見たりして、日々切磋琢磨しています。

今は、まず教師自身が授業をつくることに夢中になって、子どもの問いを大事にし、自分と子どもとの距離感を大事にしながら、社会の授業を楽しんでいきたいと思っています。



福島大学附属小学校 教諭

板倉 正哉



資料① 授業改善のための「問い」の重要性

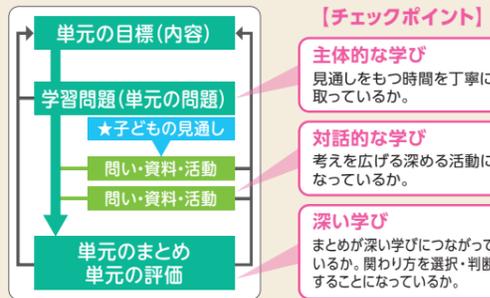
これからの時代に求められる資質・能力を身に付けさせる

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブラーニングの視点に立った授業改善）の推進が必要

深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要

社会的な見方・考え方を働かせる「問い」の設定が不可欠
深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論などの学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。

資料② 社会科の単元デザイン



資料③ よい学習問題づくりの例

〔3年：消防の仕事〕
〈学習問題〉どうして、ほとんどの火事を消し止めることができるのだろう。

第1時資料「全焼までの時間」 全焼
火がつく
0分 5分 10分
たった10分で全焼してしまつてびっくりしました。

第2時資料「火災の発生件数と全焼した件数」
10分で全焼してしまうのに、182件の火災の中で5件しか全焼しなかったのはどうしてなんだろう？

学習問題 世田谷区ではどうしてほとんどの火事が全焼する前に消し止められているのだろう。

予想
消防車が早く来て消しているのだと思う。
町で消防団の人を見たことがあるから関係あるんじゃないかな。
119番に電話したからだと思う。
学校や町の中にも消火器が置いてあるからすぐに消せるのだと思う。

学習計画
・消防署の働きについて調べる。
・119番通報について調べる。
・消防団の働きについて調べる。
・学校や町の消防施設・設備について調べる。

授業をどう変えればよいイメージなのか？

板倉 新学習指導要領の趣旨を生かした授業をするにあたり、現場で大切にしなければならないことは何ですか。

小倉 まず確認しておきたいことは、最終的に私たちが目指すのは、子どもたちの資質・能力の育成です。そのための授業改善であり、その授業改善のためには、深い学びの鍵として見方・考え方を働かせることが重要で、その見方・考え方を働かせるためには、「問い」がとても重要だという構造です。（資料①）

と同時に今改訂は、普段の学習活動の質の向上が求められています。主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善をデザインするということは、「問題解決的な学習過程の充実」です。問題解決的な学習は45分の授業だけで考えるのではなく、特に「単元」を通してデザインします。そして問題解決的な学習を展開していく上で、特に大事にしなければならないのは、教師が無理におしつけるのではなく、子どもたちが自然に「見方・考え方を働かせる」ということです。

単元の授業デザインと「見方・考え方」

板倉 教師が子どもに見方・考え方を働かさせるのではなく、自然と見方・考え方を働かせるようにすることがポイントだと思いますが、現場の先生にとってそこが難しいと思います。

小倉 そのことは「授業づくり」にも関わってきます。子どもたちが見方・考え方を働かせて問題解決できるように、教師が子どもの「問い」を軸に単元を通してデザインしていく必要があるということです。（資料②）

まず、学習問題をしっかり共有し、予想ができて見通しをもてる学習問題にしないと、解決に向かう「問い」につながっていきません。少なくともこの単元を通して、何をどのように調べていけばよいのかという予想をもてないと、教師が「問い」を提示してやらせることになってしまいます。（資料③）

でも、子どもの予想だけでは、学習問題の解決や概念的な知識の獲得にたどり着かない場合もあるので、ここは教師の出番です。先生は問い返しをしたり、新たな問いを設定したりする必要があります。

板倉 子どもたちが見方・考え方を働かせる授業づくりのポイントや注意点などがあれば教えてください。

小倉 見方・考え方を働かせて、何をするかというと、

- ・社会的事象の特色や意味などを考えること
- ・社会の課題を把握して、関わり方を選択・判断すること

なのです。子どもたちが見方・考え方を働かせて考えることができるように、教師は問いや資料や活動を工夫することが大切です。

小倉 さらに、系統性を意識することが大事です。今回の学習指導要領では、内容の整理・改善で、中学校への接続・発展を視野に入れて、次の3つの枠組みで整理されています。

- ① 地理的環境と人々の生活
- ② 歴史と人々の生活
- ③ 現代社会の仕組みや働きと人々の生活

例えば、③に関して、国土の防災安全という点から考えると、4年「自然災害から人々を守る活動」の学習を考えると、3年「地域の安全を守る働き」とつながっています。さらに5年「自然災害の防止（国土）」、6年「自然災害からの復旧・復興（政治）」へ、そして中学校の地理的分野・公民的分野の内容につながっていく、という系統性です。

教師が系統性を意識するということは、子どもの学びが広がる、ということです。つまり、教師が系統性を意識し、子どもたちが追究の視点や方法を繰り返し使うように仕掛けることが重要であり、それにより子どもたちは見方・考え方を自分で使えるようになっていくのです。（資料④）

深い学びの実現と、「評価」

板倉 主体的・対話的で深い学びとあります。主体的・対話的かどうかは子どもの様子から見取ることができますが、深い学びの深さのレベルはどのように捉えるのでしょうか。

小倉 学習指導要領には、目標と内容が示されています。

- ・どういう子どもたちを育てる。（目標）
 - ・どういう内容で育てる。（内容）
- それが「入り口」です。「出口」は、
- ・実際に子どもたちがどういう姿になったらいいか。（評価）
- それが今回示されました。

つまり、入り口から入って目標を実現した子どもたちの姿をしっかり描くことが、深い学びの実現であると考え、どういう子どもを育てるかという単元設計をして、出口に向かって進んでいけば深い学びの実現ということだと思います。

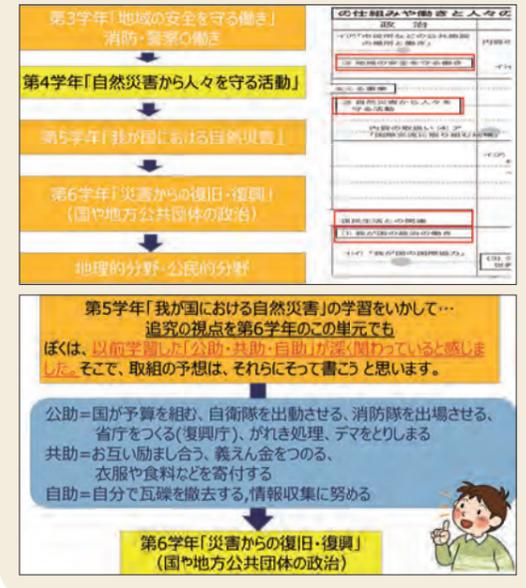
このように考えると学習評価とは、教師が単元設計をすることです。“こういう子どもの姿を見取っていく”というように、学習過程をイメージして目標を実現した子どもの姿を具体的に設定します。そして、ねらいや活動を設計した上で、見取る観点を設計します。1時間に1観点程度を見ていき、それが単元を通すと全観点の評価が網羅されていて、その結果、1つの単元を通して子どもたちに育てたい力を見取る（評価）ができるということになります。

つまり、学習評価と指導は一体であることを意識することが大切です。



資料④ 「見方・考え方」と系統性の例

③ 現代社会の仕組みや働きと人々の生活



資料⑤ 単元のまとめと評価

